The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パスカル『パンセ』断章S132 における視覚のメタファー ： 判断の対立
Author(s)	川上, 紘史
Citation	Gallia. 2020, 59, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77091
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パスカル『パンセ』断章 S132 における視覚のメタファー
—— 判断の対立 ——[1)] [2)]

川上　紘史

序

パスカルはしばしば認識のモデルとして視覚を用いている。彼は「見る voir」ことを知的活動の土台となる認識を獲得するための行為とみなしているのだ。見ることによって獲得される認識に、パスカルは以下の四つのニュアンスを込めている。1 / 直観的・主観的認識であるがゆえに認識そのものは確実である。2 / 物事は多面的であるが人間は一面しか把握できないために認識自体は不完全なものとなる。3 / 物事のどの側面を把握するかは意志に一任されている。4 / 1 − 3 故に、同じものに対し個々人が異なる判断を下し、対立が生じる[3)]。

この 4 つ目の特徴、判断の対立について、パスカルが視覚のモチーフを用いて説明している断章がある。それは「現象の理由 Raison des effets」と題されたファイルに含まれる S132 である。多くの研究者はこの断章の冒頭にあるモンテーニュとエピクテトスから借用あるいは換骨奪胎した部分を分析してきた[4)]。しかし、それに続くパスカル自身のテクストには、これまであまり分析が行われてこなかった。おそらく、パスカルの文章自体が一見極めて明瞭であり、あえて分析するまでもないと思われたためである。しかし、「キリスト教護教論」[5)] がキリスト教の正しさを認めない人にその正しさを認めさせることを目的としている以上、認識の対立についてパスカルがどう理解しているのかを確認することには大きな意義がある。故に、本稿では『パンセ』S132 を、視覚のモチーフに注目しつつ読解することを通じて、認識の対立というありふれた事態をパスカルがどのように理解していたかを明らかにすることを目指す。

1）『パンセ』からの引用は Les *Pensées*, texte établi par Philippe Sellier, présentée et annotée par Gérard Ferreyrolles, Paris, Le Livre de Poche classique, 2000 による。引用箇所の断章番号を略号 S（Sellier）とともに記す。

2）本稿では「びっこ」「不具」のような現代的視点からは不適切に思われる表現を用いているが、それはパスカル自身があえて刺激の強い言葉を用いていることを考慮したためであり、差別的意図からではないことをあらかじめお断りしておく。

3）川上紘史「『パンセ』における «voir»」『Correspondances（コレスポンダンス） 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』、朝日出版社、2020 年 2 月刊行予定。

4）Laurent Thirouin, *Pascal ou le défaut de la méthode, Lecture des* Pensées *selon leur ordre*, Paris, Honoré Champion, 2015, pp. 160-164. Jean Mesnard, «L'exemple dans les *Pensées* de Pascal», dans *Poétique de la pensée, Études sur l'âge classique et le siècle philosophique, En hommage à Jean Dagen*, Paris, Honoré Champion, 2006, pp. 569-585. Pierre Force, *Le problème herméneutique chez Pascal*, Paris, Vrin, 1989, pp. 225-231.

5）『パンセ』は、晩年のパスカルが取り組んでいた、キリスト教の正しさを不信仰者に説得するための未完の書物の準備メモの集積である。この未完の書物のことを「キリスト教護教論 *L'Apologie de la religion chrétienne*」と呼ぶ。

1. 対立の原因―判断の違いの現れ

先述の通り、パスカルはこの断章をモンテーニュとエピクテトスから借用した具体的な例の考察から始めている[6]。まずはモンテーニュから借用したびっこの概念[7]からパスカルが引き出した問いを見よう。

> D'où vient qu'un boiteux ne nous irrite pas et un esprit boiteux nous irrite[8] ?

通常、不具は私たちに哀れみを抱かせるはずである。事実、私たちは身体的なびっこに哀れみを覚える。しかしながら、精神的な不具には怒りを覚えるというのだ。パスカルはこれを事実として提示している。この態度についての道徳的判断が問題なのではない。現実に精神的不具が私たちに怒りを覚えさせている理由が問題なのだ。パスカルはこの問いに次のように答える。

> À cause qu'un boiteux reconnaît que nous allons droit et qu'un esprit boiteux dit que c'est nous qui boitons. Sans cela nous en aurions pitié, et non colère[9].

身体的なびっこは私たちの判断に同意する。彼の歩みは曲がっており、私たちはまっすぐ歩いているのだ。精神的なびっこは違う。彼は、私たちの認識が歪んでいるから、正しい彼らの認識に私たちが言い掛かりをつけている、と主張する。このように見ると、一見「そのこと cela[10]」は判断の対立を指すように思われる。精神的びっこが自身の認識が歪んでいると認めれば、「私たちはびっこの精神に怒りではなく哀れみを持つだろう nous en aurions pitié, et non colère[11]」というのだから。だが、問題を判断の対立に安易に単純化するべきではないだろう。

動詞 «dit» に注目しよう。「びっこの精神は私たちこそがびっこであると言う un esprit boiteux *dit* que c'est nous qui boitons[12]」のだ。この «dit» に重きを置いて、私たちは「そのことなしに」を解釈したい。すなわち、「「びっこの精神が私たちこそびっこなのだと言う」ことなしに」と読みたいのだ。確かに、この違いは一語でしかない。しかし、それはとても重大な違いである。先の解釈において、問題となっているのは私たちと対話相手の間の対立である。こちらの解釈において

6）S132 は同じ紙片に連続して記されているため、セリエ版およびル・ゲルン版では同一の断章として扱われている。が、手稿原稿ではモンテーニュ、エピクテトスの例の後に、断章間の区別を示す短い線が記されている。故にラフュマ版では二つの断章に分けている。とはいえ、区切りの後の部分は「そのことを引き起こすのは」«Ce qui cause *cela*»（強調は引用者による）という表現から始まっている。この *cela* は明らかにモンテーニュ、エピクテトスの例を示している。ゆえに本稿では S132 全体が一貫した論理の下に書かれていると判断した。

7）Montaigne, *Essais*, éd. P. Villey, réimprimés sous la direction de V.-L. Saulnier, Paris P.U.F, 1965, III, 8, p. 929.

8）S132.

9）S132.

10）S132.

11）S132.

12）S132、強調は引用者による。

問題となっているのはこの対立が可視化されることである。

実際、精神のびっこが本当に私たちと判断を共有しているか否かは重要ではない。仮に腹のなかで精神のびっこが私たちこそ間違っていると思い、私たちを内心あざ笑っていても、彼がそれをおくびにも出さなければ、私たちにはそれを知るすべはない。ならば、当然私たちは怒りを覚えることもない。パスカルは S122 においてこのことを他者の怒りを掻き立てる側から描いている。

> C'est l'effet de la force, non de la coutume, car ceux qui sont capables d'inventer sont rares. Les plus forts en nombre ne veulent que suivre et refusent la gloire à ces inventeurs qui la cherchent par leurs inventions. Et s'ils s'obstinent à la vouloir obtenir et à mépriser ceux qui n'inventent pas, les autres leur donneront des noms ridicules, leur donneraient des coups de bâton. Qu'on ne se pique donc pas de cette subtilité ou qu'on se contente en soi-même[13].

発明家は発明によって栄光を獲得し、自己愛を満足させたいと思っている。しかし、多くの発明家でない人たちは、発明の利益のみを享受し、その栄光を発明家に与えようとはしない。この時、発明家が自分に栄光があるのだと主張し、栄光を認めない奴は愚かだと言って軽蔑の態度をあらわにするならば、「発明家以外の人たちは彼らに馬鹿者の名を与え、彼らを棒で打擲することだろう les autres leur donneront des noms ridicules, leur donneraient des coups de bâton[14]」。その事態を避けるためのパスカルの助言が、「故に、この鋭敏さを誇らないか、自分自身において満足するがいい Qu'on ne se pique donc pas de cette subtilité ou qu'on se contente en soi-même[15]」である。栄光そのものを諦めろ、軽蔑するのをやめろとパスカルは言わない。確かに発明の栄光は発明家にあり、それを認めないものは愚かである。発明家のこの確信をパスカルは尊重する。彼らにとってそれは真であるのだから[16]。重要なのはそれを他者に主張しないことだ。彼らがどれほど他者を軽蔑していようとも、その態度が隠されていれば、軋轢は生まれないのだ。

2. 判断の確実性

前節の分析が正しければ、語ることによって判断のずれがあらわになることが似通った現象―ここでは身体的びっことびっこの精神―に対する反応の違いを生み出しているように思われる。しかし、ことはそう単純ではない。エピクテトスの『語録』からパスカルが借りた例を見てみよう。

13）S122.
14）S122.
15）S122.
16）Cf. S339 : «Les grands génies ont leur empire, leur éclat, leur grandeur, leur victoire et leur lustre, et n'ont nul besoin des grandeurs charnelles, où elles n'ont pas de rapport. *Ils sont vus non des yeux mais des esprits*, c'est assez». 強調は引用者による。

> Épictète demande bien plus fortement : Pourquoi ne nous fâchons-nous pas si on dit que nous avons mal à la tête, et que nous nous fâchons de ce qu'on dit que nous raisonnons mal ou que nous choisissons mal[17) ?

ここには三つの例が挙げられている。頭痛、間違った推論、選択の誤りである。これらはどれも私たちを対象とする対立する判断の言明である。ロラン・ティルアンが適切にいうように、「私たちはここではもはや判事ではなく、判断の対象である。そして、〔…〕判断は間違っている Nous ne sommes plus ici juges mais objets de jugement et [...] le jugement est erroné [...][18)」。それにも関わらず、私たちはそれらに異なる反応を返す。最初のものには怒りを感じることはないのに、後二者には怒りを感じる。意見が対立していても、怒りが生じない場合があるのだ。では何がこの違いを引き起こすのか。パスカルは次のように説明を加えている。

> Ce qui cause cela est que nous sommes bien certains que nous n'avons pas mal à la tête, et que nous ne sommes pas boiteux, mais nous ne sommes pas si assures que nous choisissons le vrai[19).

反応の違いは他者から非難された判断の確実さの度合いの違いによって引き起こされる。ここで確実さが問われている判断は「私たち自身の判断（頭が痛い、正しい選択をしている）についての私たちの判断」であることを見逃してはならない。ティルアンの表現を借りるなら、私たちはここで判事であるとともに判断の対象なのだ。

この時、パスカルはある種の判断が十分確実であると述べている。それは感覚に基づく判断である。別の断章においてパスカル自身が述べているように、「感覚による知覚が真である les appréhensions des sens sont toujours vraies[20)」、すなわち私たちが斯く斯くのように感じているという事実は常に真であるので、私たちの頭痛についての判断、私たちの足に感じる不具についての判断は何の疑いもなく真である。他者が何と言おうと、どのような客観的状況に置かれていようとも、頭が痛いときに私たちは頭痛を感じている。頭痛を感じていない場合には、私たちの頭が痛いだろうという他者の判断が誤りであることに何の疑いもない。びっこについても同じである。私たちが歩くのに困難を感じていないならば、私たちは足に不具を認めることはない。

これら感覚的認識に基盤を持つ判断が確実に真であるのに対し、著者によると、私たち自身が正しい判断を選んでいることにはそこまでの保証はない。この時パ

17）S132.
18）Laurent Thirouin, *op. cit.*, p. 164.
19）S132.
20）S579.

スカルが用いる「強く保証されてはいない nous ne sommes pas si assurés[21]」という表現は人間の真の選択には保証が全くないかのような印象を私たちに与える。しかしそうではないだろう。私たちは「真を選んでいる」と理由なく思い込んでいる訳ではない。この一節は、感覚に基づく認識と比べてこの確信は確実性に劣る、という意味で解釈すべきである。ではこの時、何が真を選んでいる保証となっているのか。パスカルの述べるところを見てみよう。

> De sorte que, n'en ayant d'assurance qu'à cause que nous le voyons de toute notre vue, quand un autre voit de toute sa vue le contraire, cela nous met en suspens et nous étonne [...][22].

私たちの判断の保証は、私たちが見ていることだけである。この表現は、一見すると、私たちの判断はなんの根拠もないと言っているようにも思われる。しかし、そうではない。見ていることは非常に強固な保証である。誰も直観的認識そのものを否定することはできないのだから。直観的認識に基づく判断もまた、論理的な誤りがない限り、常に真である。この意味において私たちの真の選択と、頭痛、びっこに関する認識は同じ確実さを持つ。では、確実さに差を生み出しているのはなんなのか。それは他者の直観的認識に基づく対立する判断の出現である。私たちと同じように、他者が全視力で獲得した認識に基づいて反対の判断をなすことがありうるのだ。「この矛盾はびっこに関する感覚においては決してない Il n'y a jamais cette contradiction dans les sens touchant un boiteux[23]」。ではなぜこの矛盾が私たちの判断の保証に傷をつけるのか。

通常私たちは次のように思い込んでいる。万人が同じ方法で物事を認識している。真実は一つしかない。異なった多くの直観的認識があるとき、そのうちの一つだけが真であり、他のものは必然的に誤りである。この先入見故に、他者が彼らの直観的認識に基づく反対の判断を私たちに提示するとき、私たちが真を選んでいることの保証は必然的に確実さを減らすことになる。というのも、理性的に言うならば、判断が対立している時、どちらかが論理もしくは前提において誤りを犯しているはずである。そして、論理において誤りがないとすれば、誤りは前提において、すなわち直観的認識にあるはずである。しかし、この時、理性は直観的認識の誤りについての判事の役割を果たすことはできない。というのも、「本性的に人間は自身が把握している側面において誤ることはない [l'homme] ne se peut tromper dans le côté qu'il envisage[24]」。理性は直観そのものの真実性を判定することができないのだ。その結果対立する意見を前にした私たちは判断を停止し、驚くことになる。この時、パスカルが「怒る colérer」、「苛立つ irriter」ではなく「驚く étonner」と言う言葉を用いている点は興味深い。自分の認識と相手のそれ

21）S132.
22）S132.
23）S132.
24）S579.

との差異を不快に思う段階を超えて、同じものを同じように「見て」いるにも関わらず同じ認識に至らないことに素朴に驚いているのだ。そしてこの驚きは、自分と直観的認識を共有しない人が増えれば増えるほど増大する。

> [...] cela nous met en suspens et nous étonne, et encore plus quand mille autres se moquent de notre choix, car il faut préférer nos lumières à celles de tant d'autres. Et cela est hardi et difficile[25].

「多くの他者が私たちの選択を馬鹿にする mille autres se moquent de notre choix[26]」。彼らは単に反対の判断を表明するだけにとどまらない。彼らははっきりと私たちの選択が間違いだと言うのだ。しかし、どうして彼らはそんなことを言えるのか。彼らの判断が私たちの判断以上に確実だというわけではないというのに。彼らもまた自身の判断の根拠として、彼らが「全視力で反対のことを見ている voi[ent] de toute [leur] vue le contraire[27]」ことしか根拠を持っていないのだから。彼らの確信に満ちた態度の理由は、多数性という現実の力にある。彼らは数の力という現実の力を有しているのだ。「唯一の普遍的な規則は通常の事柄については国家の法であり、その他のことについては多数性である。なぜこのことが起きるのか。そこにある力によってだ Les seules règles universelles sont les lois du pays aux choses ordinaires, et la pluralité aux autres. D'où vient cela ? De la force qui y est[28]」。多数派は少数派が間違っていると言い、もし少数派がそれに反抗しても、多数派は実際に暴力に訴えることで少数派の意志を従わせることができる。すでに発明家の例において見たように、多数派は少数派に「馬鹿者の名を与え、彼らを棒で打擲するだろう[29]」。多数派は現実の被害をちらつかせて、少数派に自身の選択が誤りであると認めさせるのだ。このように多数派は私たちの真の選択を現実の力によって馬鹿にすることができる。だが、現実の危険は真の認識そのものとは本質的に何の関係もない。私たちは数の力によって自身の直観的認識を曲げることはできないし、そうするべきではない。だが、それは相手の直観的認識についてもまた同様である。私たちにはそれを否定することはできない。故に、私たちはただ宙吊りになり、驚くことしかできないのだ。

3. 認識をもたらす光

以上が、パスカルの示す、対立する判断によって引き起こされる私たちの困惑の論理である。ところで、パスカルはこの現象の理由を「なぜなら私たちの光を他者の光よりも優先しなくてはならないから car il faut préférer nos lumières à

25）S132.
26）S132.
27）S132.
28）S116.
29）S122 : « Et s'ils [=les inventeurs] s'obstinent à la [= la gloire de l'invention] vouloir obtenir et à mépriser ceux qui n'inventent pas, les autres leur donneront des noms ridicules, leur donneraient des coups de bâton. ».

celles de tant d'autres[30]」と説明している。だが、それはなぜだろうか。その理由を電子版『パンセ』の編者は次のように説明している。「人は他者の光よりも私たちの光を優先することの他にできることはない。なぜなら、人は目と精神に明白であるように思われるものを否定することもできなければ、単に他者がそう主張しているからと言って、私たちの確実さに反して何かを信じることもできないのだから on ne peut pas faire autrement que préférer nos lumières à celles des autres, car on ne peut pas nier ce qui semble évident aux yeux et à l'esprit, ni croire quelque chose seulement parce que d'autres l'affirment, contre notre certitude[31]」。私たちがすでに確認したように、現に今認識しているという事実を私たちは完全に否定することができないので、判断の際、私たちは私たちの光を優先するのである。

この時、私たちはちょっとした疑問を抱く。なぜ優先されるものは光なのだろうか。「私たちが見ているもの」と「私たちの光」は同じものだろうか。違いがあるとすれば、それはなんだろうか。要するに、「私たちの光」とは一体なんなのだろうか。その手がかりとして、Gradation の断章と呼ばれる S124 を見てみよう。

> Gradation. Le peuple honore les personnes de grande naissance. Les demi-habiles les méprisent, disant que la naissance n'est pas un avantage de la personne, mais du hasard. Les habiles les honorent, non par la pensée du peuple, mais par la pensée de derrière. Les dévots, qui ont plus de zèle que de science, les méprisent, malgré cette considération qui les fait honorer par les habiles, parce qu'ils en jugent par une nouvelle lumière que la piété leur donne. Mais les chrétiens parfaits les honorent par une autre lumière supérieure.
>
> Ainsi se vont les opinions succédant du pour au contre, selon qu'on a de lumière[32].

パスカルは貴族を尊敬すべきか否かという判断について語っている。彼は人々の反応を五種類に分けている。1 / 何も知らない人民は「生まれが現実の優位である la naissance est un avantage effectif[33]」と見て貴族は尊敬するべきだと判断する。2 / これに対し、生半可な知識人は生まれの良さは当人の持つ優位ではなく偶然の優位であることに着目し、生まれの良さ自体を尊敬の理由とすることを否定する。その上、そのような虚偽に基づいて尊敬されようとしていることから貴族を軽蔑する。3 / しかし、知識人は別の観点からこの問題を考える。彼らは次の認識から出発するように思われる。「最大の悪は内戦である。もし長所に報いることを望むのであれば、内戦が起きることは確実だ。誰もが、我こそがそれに値するという

30）S132.
31）*L'Édition électronique des Pensées de Blaise Pascal*, créé en 2011 par Dominique Descotes et Gilles Proust, S132, http://www.penseesdepascal.fr/Raisons/Raisons17-approfondir.php, accédé 17/01/2019.
32）S124.
33）S126.

であろうから。生まれの権利によって引き起こされる馬鹿者に関する恐るべき悪はそこまで大きくないし、そこまで確実でもない Le plus grand des maux est les guerres civiles. Elles sont sûres, si on veut récompenser les mérites, car tous diront qu'ils méritent. Le mal à craindre d'un sot qui succède par droit de naissance n'est ni si grand, ni si sûr[34)]」。個々人が持つ長所に相応した評価を人は求める。しかし、自身の長所を完全に客観的にはかることなどできない。故に、各人が自分の長所を他者のそれより優れたものと主張することになる。その結果、最大の悪、内乱が起こる。これに対し、生まれの良さには曖昧なところはない。王子が女王の息子であることは疑うことができない。生まれの良さを評価の基準として受け入れることで、内戦は起きない。故に、知識人は人民同様に貴族を尊敬する。だがそれは平和を維持するための「裏側の考えによって par la pensée de derrière[35)]」である。

4 / しかしながら、その論理を知りつつも、熱心な信者は貴族を尊敬することを否定する。彼らは次のように考える。確かに貴族を尊敬することで現世はうまく治まる。しかしその平和は神の国の平和の似姿に過ぎない[36)]。現世に神の国を実現するために、生まれによって人間を区別することを熱心な信者は許容できない。神の前に万人は平等なのだから。5 / だが、完全なキリスト教徒は貴族を尊敬することを選ぶ。「しかしながら真のキリスト教徒は愚かさに従うことを選ぶ。彼らが愚かさを尊重しているからではない。人間への罰として人間をこれらの愚かさに従わせた神の秩序を尊重しているからだ Les vrais chrétiens obéissent aux folies néanmoins, non pas qu'ils respectent les folies, mais l'ordre de Dieu qui pour la punition des hommes les a asservis à ces folies[37)]」確かに、生まれによって誰かを尊重したり侮ったりするのは馬鹿げたことだ。しかし現世においてこの馬鹿げた規則に従うことを神が望んでいる。故に、完全なキリスト教徒は神の意志にしたがって貴族を尊重するのである。

賛成と反対の間を移り変わりゆくこの運動は、パスカルによれば、人が持つ光から生じている。ところで、この運動を生み出す直接的な原因は、人が対象を認識している側面の違いであることは明らかだ。例えば、生半可な知識人は貴族の生まれが現世の優位を生み出す理由に目を付ける。知識人はそれに加えて、現世の治世に関する側面、人間のエゴイズムの側面を見ている。この分析が正しければ、私たちの光は、その強弱に従って物事の側面を照らし出し、人間に見えるようにする役割を持つと言えるだろう。

ところで、パスカルが S132 で私たちに示す五種類の人間のうち最初の三つにおいて、peuple より優れた意見を持つものを demi-habile, それより優れた意見を持つものを habile とパスカルは呼んでいる。フュルチエールによると、«habile» は「精神、器用さ、学問、能力を持つ人 Qui a de l'esprit, de l'adresse, de la science, de

34）S128.
35）S124.
36）Cf. S150 : «Grandeur de l'homme dans sa concupiscence même, d'en avoir su tirer un règlement admirable et en avoir fait un tableau de la charité.»
37）S48.

la capacité」を意味している[38]。この時、彼らの光は理性の光であり、その強弱が彼らの認識の差を引き起こしていると言えるだろう。

興味深いのは知識人と熱心な信者の間で起きる賛成から反対への運動である。パスカルによると、熱心な信者は、知識人が貴族を尊敬する理由を共有していたとしても、知識人の意見に反する意見を表明する。なぜなら、熱心な信者は「信仰心が彼らに与える新しい光によって par une nouvelle lumière que la piété leur donne[39]」貴族を尊敬するべきか否かを判断しているから。『パンセ』の著者は人間の認識は単に理性の光によってのみ影響されるのではなく、信仰の光、さらに、完全なキリスト教徒の持つ、より優れた光によっても影響されると考えている。

この時重要なのは、信仰の光が明らかにする物事の側面を、理性の光は決して照らし出すことはできないということである。というのも、パスカルによれば、「私たちは神の存在も、神の本性も認識しない。なぜなら神は延長も限界も持たないのだから。しかし、信仰によって私たちは神の実在を認識し、栄光によって私たちは神の本性を知る nous ne connaissons ni l'existence ni la nature de Dieu, parce qu'il n'a ni étendue, ni bornes. Mais par la foi nous connaissons son existence. Par la gloire nous connaîtrons sa nature[40]」のだから。現世と神の国の関係の視点、神の下の人間の平等といった視点から対象を見ることは、信仰の光なしには、不可能である。

以上から、パスカルが用いている光のイメージを次のように整理できるだろう。光はその強弱によって対象の異なった側面を私たちに明らかにする。だが光は単一のものではない。光は本質的に少なくとも二種類、自然の光と信仰の光に分類される。そしてそれぞれの光が対象の様々な面を浮かび上がらせるのだ。それは、私たちに身近な例えを用いるなら、自然光とブラックライトの関係になるだろう。例えば、ここに一枚の紙幣があるとしよう。私たちはその真贋を調べなくてはならない。通常の光の下では、私たちは、明るいほど細かい点まで見ることができ、真贋の判定がしやすくなる。しかし、ブラックライトでその紙幣を照らしてみよう。この時、紙幣が本物なら何らかの模様が浮かび上がってくる。現代の多くの紙幣は偽札防止のために、UV 不可視インクを用いて模様が描かれているのだ。ブラックライトを持っていれば、紙幣の真贋は一目瞭然となる。この印は、太陽の下ではどうやっても見ることができない。理性の光と信仰心の光の関係も同じだ。理性の光では明らかにできなかったものを信仰の光が明らかにするのである。言い換えれば、信仰の光を持たない人には、信仰の光を持つ人が見ているものは決して見えない。この時、信仰の光を欠いている人は、信仰の光を持っている人の見ているものを自然の光によって見ようと努力することしかできない。

この S124 の簡単な分析を踏まえると、パスカルにとって光は物事の側面を人間に見えるようにするものであると言えるだろう。してみると、S132 における「私

38）A. Furetière, *Dictionnaire universel*, éd. 1690, La Haye, 3. Vol., art. « habile ».
39）S124.
40）S680.

たちの光を他者の光よりも優先しなくてはならない il faut préférer nos lumières à celles de tant d'autres[41]」という言葉は、私たちに対象をそのように直観させるものを他者にとってのそれよりも優先しなくてはならない、と言っていることになる。この時、«il faut» は義務と同時に必然を示していると言えるだろう。すなわち、1/ 数という現実の力を備えた他者の光に屈せずに、自分の直観的認識の正しさを確信し続けねばならない、という意味と、2/ 他者がどんな光によって事柄の側面を目にしていようとも、私たちは私たちの持つ光によってしか事柄を見ることはできない、という意味である。

まとめ

以上、私たちは S132 における判断の対立のパスカルによる説明を視覚のモチーフに注目して分析してきた。それによってあらわになったのは、対立する認識を前にした人間の内的運動をパスカルがどう理解していたか、ということである。あらゆる判断は根本的に直観的認識に支えられている。正しいことをなしているという判断さえも、「私たちが真を全視力で見ている nous le voyons de toute notre vue[42]」ことを基盤としているのだから。誰もこの前提となる認識の確実さを否定しようがない。しかしながら、この直観的認識に基づく判断は同様の基盤をもつ相反する判断と出会うことがある。私たちの判断と対立する判断もまた直観的認識を根拠としているならば、一方が真であると論証することは誰にもできない。だから、もし相手が彼らの意見に従うよう私たちに強いたとしても、私たちが間違っており、対話相手が正しいと認めることは私たちにはできない。「私たちの光を他者の光よりも優先しなくてはならない[43]」、すなわち私たちは私たちの光が私たちに明らかにする側面によってしか物事を見ることはできないのだから。そして、その逆もまた同じである。他者は私たちの光よりも他者自身の光を優先するほかないのだ。

パスカルは判断の対立というありふれた事態の根元に、人間の認識の主観性とその共有の困難さをはっきりと見抜いているのである。

（大阪大学博士課程在学中）

41）S132.
42）S132.
43）S132.